

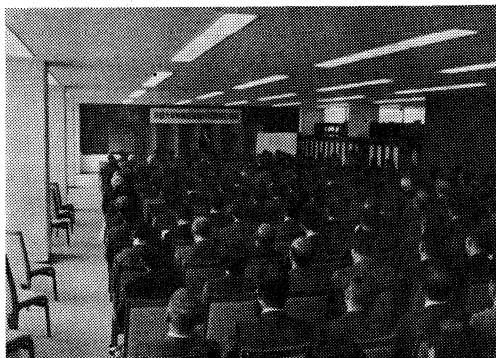
がない。これで、やっと入学試験にパスして大学へ進学した学生の意欲というもの、関心というものをつなぎとめられると考えるのは、むしろおかしいのではないのだろうか。私は、手もちの資料をどしどし開架に出しながら、何か、一生のめぐり合い、あるいは図書館へ来て、はじめて自分の何か、授業では得られなかったような知的な刺激を与えられるような機会をつくっていかう、ということ、もちろん授業に直接関連した従来の指定書を整備しておくことも大事でございますけれども、やはり何かのきっかけで、その学生たちの知的燃焼をたすけるようなことをしなければならぬと考えているわけであります。

図書館は、本を並べておいて、夜店のようにひやかしながら利用者が流れていくというだけでは全く意味がないわけであります。やはりスパークするとか、火花を散らすとか、そういう選びぬかれた情報と学生との間に知的エネルギーの燃焼といいますか、そういうものがなければ、本当は図書館というものの存在意味がないのではないかと思います。さきほど高村館長が、「図書館は大学における教育・研究の支援機関である」ということを明言されました。全くそのとおりで

あると思います。私もよい意味で京都大学の図書館に負けないように、新しく年々入学してくる学生が、まさに知的関心を燃やして、そして、教育・研究の上で充実した生活が送られるように、私どもの図書館も、ぜひ、よい意味での競争相手として、今後やっていきたいと思ひます。おそらく全国国立大学図書館協議会の同僚の方々も全く京都大学の図書館をご覧になれば、私と同じように感じられると思ひます。

私は古いことは知らないのですが、最後に、中国の古典「大学」の一句と聞いていますが、「つつしみて日に新たに、日に新たに、また日に新たなり。」ということばを贈りたいと思ひます。開館式当日の図書館がいちばん新しく、日に日に古びていくだけではないと思ひます。図書館が教育・研究の上で利用者のためになすべきこと、した方がよいことがらは無限にあるはずで、毎日のように、そうした営為と工夫がつみ重ねられるならば、高村館長のいわれる「年輪」がこの図書館の本に家具に壁にしみこんでくるに相違ありません。心からご発展をお祈りし、お祝いのことばに代えさせていただきます。

開館記念式典の挙 行



3月21日(水)、京都大学附属図書館新館開館記念式典が、総長、部局長はじめ学内外の関係者多数の出席を得て、新館2階開架閲覧室(南側)

において挙行された。

この式典は、午後1時に始まり、高村仁一附属図書館長の式辞に続いて、沢田敏男総長の挨拶、廣田史郎文部省学術国際局情報図書館課長、裏田武夫国立大学図書館協議会会長(東京大学附属図書館長)の祝辞、岡本道雄前総長ほかの祝電披露、戸田建設株式会社ほか4社に対する感謝状の贈呈が行なわれ、午後2時終了した。

引き続き、午後2時20分から同開架閲覧室(東側)において披露パーティーが催された。

なお、3月22日(木)、23日(金)、24日(土)の3日間、学内者に対するオープンハウスが行なわれた。